

Career

キャリア理論で読み解く 女性の働き方

－「ちょっと先行く先輩トーク」の事例から

重原惇子

特定非営利活動法人参画プラネット常任理事
キャリアナビゲーター
キャリアアドバイザー
岐阜県若者サポートステーションキャリアコンサルタント
名古屋文理大学情報文化学部PR学科講師
名古屋市立大学人間文化研究所特別研究員

キャリア理論で読み解く女性の働き方

—「ちょっと先行く先輩トーク」の事例から

重原 惇子

はじめに

2008年度のNPO法人参画プラネット（以下参画プラネット）は、前年度に引き続き、指定管理者事業、講座・セミナー事業、チャレンジデスク事業、政策作成事業、講師派遣事業、各種研究事業などを実施した。筆者はキャリアアドバイザーとして、キャリア・ナビゲートやちょっと先行く先輩トークなどのチャレンジデスク事業を中心に、参画プラネットに関わった一年であった。キャリア・ナビゲートは、女性の就業支援を目的とするチャレンジデスク事業の一環であり、これは①キャリア・ナビゲートに加えて、②私のキャリア発見塾と③ちょっと先行く先輩トークの3プロジェクトを柱に成り立っている。今年度はHPでの事例集や情報提供などにも注力し、活動の幅を拓げてきた。

本稿では今年度からの新プロジェクトである「ちょっと先行く先輩トーク」に焦点をあて、事業実施における目的、意義について述べた後、その理論的分析を試みたいと考える。

1 ちょっと先行く先輩トークの出発点

もともとは、独立行政法人国立女性教育会館が刊行した「キャリア形成に生涯学習を生かした女性たち」「キャリア形成にNPO活動をいかした女性たち」¹に触発された事業だといえる。この2冊は、学習やNPO活動を通して成長し、キャリアアップしてきた40人以上の女性たちへのインタビューをまとめたものである。全国のさまざまな女性たちの事例を知ることで、一人ひとりが自分の将来像をイメージし、キャリア形成への道筋の参考になるようにと編集されている。同様に、身近なところで働いている女性たちに自分の経験を話してもらうこともまた、多彩なキャリアの提示につながるのではないかと、「ちょっと先行く先輩トーク」の企画が始まった。ロールモデルとしては、参画プラネットに縁のある女性たちに講師として語ってもらうこととした。プログラムは以下の通りである。

第1回	2月6日(水) 講師：深井希代	転居しても継続チャレンジ 転居や転勤は、プラスのキャリアになる！そう考えていると、さまざまな出会いやつながりが生まれるはず。実績と確信を持って、次の土地への移住プログラムを準備中。
-----	--------------------	--

第2回	5月7日(水) 講師:伊藤静香	在宅ワークからの再出発 専業主婦からNPO活動へ。働く意義を見出した矢先、夫の仕事の都合でカナダへ転居。在宅ワークで活動を継続しつつ帰国。思春期の娘とは子離れし自立した夫婦をめざす。
第3回	6月4日(水) 講師:下総ゆかり	主婦が起業するとき 起業とは…と日々、模索中。現在は、名鉄グランドホテルの料理長を招き料理教室を開催し、「食にこだわった日帰りツアー」など、オリジナルイベントを展開。
第4回	7月2日(水) 講師:内藤志野	子育てと仕事のグッドバランス 子育て真っ最中!とはいえ、週4回/30時の仕事をこなす。2歳と4歳の子どもたちの将来を楽しみにしつつ、自分自身のために仕事に取り組む毎日を継続中。
第5回	9月3日(水) 講師:高島由美子	資格をとってチャレンジ中 10年間の専業主婦経験を経て、名古屋市男女平等参画推進センターにて開催された講座への参加がきっかけとなり仕事へのチャレンジを果たす。その後、資格取得にチャレンジ!
第6回	10月1日(水) 講師:中村奈津子	NPOでの持続可能な仕事づくり 7年の専業主婦生活の後、三女が1歳の時にNPO活動に加わり、週1回のペースからNPO法人で「まず1歩」の仕事開始。現在は、NPO法人理事およびプロジェクト責任者。
第7回	11月5日(水) 講師:林やすこ	社会人こそ大学へ 専業主婦であった40代に大病を経験。その後、放送大学へ入学。4年間で卒業し放送大学大学院政策経営プログラムへ。2006年3月に修了し、現在はNPO法人事務局長。
第8回	12月3日(水) 講師:明石雅世	地域活動とNPO活動の接点 33歳で夫と死別。生涯学習センターで学び始めたのが38歳。その後NPO活動に参画し、子ども会・PTA・福祉活動ボランティアとのつながりを実感。NPO法人常任理事。

2 事業の実施状況

水曜の午後にセンター主催の自由託児が設定されており、子育て中の女性も参加しやすいだろうという理由から、開催はすべて水曜午後とした。筆者が司会進行役となり、この「ちょっと先行く先輩トーク」が始まったのは2008年2月である。2時間の枠の中で1時間半が先輩トーク、30分を質疑応答とした。一人で長時間話し続けるのは困難かと配慮しての司会進行役だったが、まったくの杞憂に終わった。8人の先輩は皆、時間いっぱい熱く自らのライフヒストリーを語ってくれた。参加者は毎回さまざまだったが、全会

通して参加して下さった方もあり、充実した2時間だったと思う。

初期の目的は、講師が自身の人生を語ることで参加者にキャリアの事例を提示するというものだったので、事前の打ち合わせである程度質問項目を提示し、講師自身のキャリアの見直しを促し、その回答をもとに講座全体を構成することとした。実はこの事前作業を通して、講師たちは自分の人生をより深く振り返ることができたという。そして実際に参加者を前にして「今ここにいる私」がどんなプロセスを経てここに至ったかを語りながら、彼女たち自身が新たな気づきを発見したことも再々だった。

参加者へのアンケート用紙にも、話を聞く前と聞いた後でチャレンジするにあたってどのような気持ちの変化があったかを問う質問が設定された。毎回、「再チャレンジへの不安が軽減された」とのコメントが寄せられたことから、当初の企画意図である先輩女性のちょっと先を行った体験が、参加女性に対してのエンパワメントに寄与したといえよう。ホームページでトーク内容の公開を順次予定しているので、より広範なアピールも期待できそうである。

3 個別事例分析

実践事例の分析に先立ち、本稿における「キャリア」の定義を明確にしておく。「キャリア」の概念の捉え方にはさまざまな答えが用意されている。代表的とされる研究者たちの定義を金井壽宏の著書から引用する²。「キャリアとは、あるひとの生涯にわたる期間における、仕事関連の諸経験や諸活動と結びついた態度や行動における個人的に知覚された連続である (Douglas T Hall, 1976)」またより簡潔な定義としては「・・・われわれは、諸個人が四十年も五十年もの間つくことになる職種や職務の連なり (シリーズ) もまた調べる必要があるが、諸個人が仕事生活の全体を通じて担う職務の連続をキャリアと呼ぶ (Daniel C Fejdman, 1988)」。金井自身は「キャリア=成人になってフルタイムで働き始めて以降、生活ないし人生 (life) 全体を基盤にして繰り広げられる長期的な (通常は何十年にも及ぶ) 仕事生活における具体的な職務・職種・職能での諸経験の連続と、(大きな) 節目での選択が生み出していく回顧的意味づけ (とりわけ、一見すると連続性が低い経験と経験の間の意味づけや統合) と、将来構想・展開のパターン」と述べている。

行政やシンクタンクの「キャリア」の概念も列記してみる。厚生労働省は報告書の中で以下のように定義している。「「キャリア」とは、一般に「経歴」、「経験」、「発展」さらには、「関連した職務の連鎖」等と表現され、時間的持続性ないし継続性を持った概念として捉えられる」³。労働政策研究・研修機構によると「生活全体を基礎として展開される、仕事における職務経験の連鎖と、個人の内面においてそれらを意味づけていく過程」⁴とされ、文部科学省は「個々人が生涯にわたって遂行するさまざまな立場や役割の連鎖およびその過程における自己と働くこととの関係付けや価値観の累積」⁵と定義する。筆者は、女性のさまざまな役割を果たしながらの働き方を支援する立場をとるものであり、本稿においては、職業キャリアのみならず、より広い人生全般を「キャリア」として捉えている

文部科学省の定義を基盤に論をすすめることとする。

8人の講師たちは例外なく結婚・出産・育児を経験している。これをD. スーパーの「ライフ・キャリア・レインボー」のアーチの年齢に当てはめながら役割をみてみよう。「ライフ・スパン/ライフ・スペースの理論的アプローチ」とは、キャリア発達をライフ・スパンという“時間”とライフ・スペースという“役割”の視点から捉え、それに影響を与える決定要因とその相互作用を含む包括的概念であるとされる。スーパーはこの概念をよく知られる「ライフ・キャリア・レインボー」という図で表現した（図1参照）。この図の中のライフ・スペース（キャリア・レインボーの役割軸）は、仕事に関するものに限らず、個人の人生における役割全体を描写しており、「キャリア」は、単なる職業だけでなく個人が経験する多様な役割と、その取り組み方によって構成されるというスーパーの考え方を表現している。彼はその役割を「子ども」「学生」「余暇を過ごす者」「市民」「労働者」「家庭人（家計を維持する者、配偶者、親など）」「その他（病にあるもの、年金受給者、宗教人など）」と7つに分類し、それぞれの役割が演じられる生活空間は「家庭」「学校」「地域社会」「働く場」の4つであるとした。各個人は、これらの空間を舞台にして、生涯のさまざまな時期に複数の役割を演じており、その結果としてその人独自の人生、つまり「キャリア」を構成しているという。

<図1>

出典：渡辺三枝子編著 2007「キャリアの心理学」ナカニシヤ書店

結婚・出産を機に彼女たちの主たる舞台は「働く場」から「家庭」や「地域社会」となり、「家庭人」の役割が増大した。「育児」が加われば、「市民」の割合も増えてくる。ほぼ全員が子どもの成長に伴って「労働者」を目指したものの、「家庭人」としての役割を担いながらの労働に苦慮してきたといえよう。

深井は夫の転勤による転居に伴い、新たなネットワークを築く努力を何度も繰り返し、二児を設けた後その苦悩はより深刻になったという。「ライフ・キャリア・レインボー」にあてはめてみると、30歳代中盤から家庭人の割合がかなりの割合を占めることになる。そのまま専業主婦を続けることを望まなかった彼女は、年齢が進むに伴い労働者としての役割も果たしたいと悩んだわけである。内藤は就業先を決めた後に1歳と3歳の子ども達の保育所探しに奔走することになり、保育園選びなどさまざまなノウハウを蓄積する結果となった。幼い子どもを抱えながらも職場を確保できた彼女は、家庭人と労働者という役割を担いながら、走り続けている。中村もまた3人の子どもを保育園や学童保育に預け、毎年のように子ども会役員や学童保育の保護者会委員を務めながら働き続けている。子どもが3人いれば、保育園や学校、子ども会などの役員の順番も頻繁で、彼女は家庭人、労働者に加えて、地域での市民の役割が大きいといえる。明石は働きながら、地域でのNPO活動やボランティアにかなりのエネルギーを傾けている。中村同様、家庭人、労働者であり市民の役割も大きく担っているのだ。

彼女たちは自身の「キャリア」を考える時、職業への適性や希望だけに焦点を絞るのではなく、家庭生活をはじめとする個々の生活スタイルを考慮し、働く場所、働き方を選択してきたといえる。先に述べたように、「キャリア」の定義は職務キャリアをイメージして語られることが一般的である。しかし、結婚・出産でその職業履歴を中断した女性たちが再就業を希望する時は、「ライフ・キャリア・レインボー」で一覧できるように「労働者」以外の複数の役割を担っている場合が多く、彼女たちの軌跡は職務キャリアだけでは説明できない多くの役割や経験の集合体なのである。「キャリアは、単なる職業だけでなく個人が経験する多様な役割とその取り組み方によって構成される」というスーパーの立場に立てば、職務キャリアに限らず、さまざまな場所でさまざまな役割を果たしつつ働くことを選択する女性もまた、果敢に自らの「キャリア」を構築しているといえよう。

次にジョン・クルンボルツの「計画された偶発性理論」で講師たちのエピソードを捉えなおしてみる。クルンボルツはキャリアの80%は予期しない偶然の出来事によって支配されるといい、将来の目標を明確に決めて、そこから逆算して計画的にキャリアをつくりこんでいくような方法は現実的ではないと説く。むしろオープンマインドな状態の方が、予期せぬ出来事を柔軟に受け止められるとしているが、オープンマインドで棚からぼた餅を待っていればよいというのではなくて、積極的に機会をつくり出すような行動をとること、機会を活かせるような能力を身につけておくことが必要であるという。これが「計画された偶発性理論」である⁶。クルンボルツの理論では一貫して学習し続ける存在としての人間が強調される。「学習」とは「新しい行動を獲得したり、行動を変化させること」

である。人は従来の行動を変化させたり、新しい行動を獲得することによって、変化し続ける環境に適応していくことができる、とクルンボルツは考えているのだ⁷。

学生時代の夢は可愛いお嫁さんになって幸せな結婚をすることだったという伊藤は、夫の転勤直後、たまたま出かけた講演会で主催していた女性グループの会員になった。講演会も偶然なら入会のきっかけもささいなことだったが、この出会いがこの後の彼女の人生を大きく変えていく。グループのメンバーに触発され、夫の転勤による二度の海外赴任を経て、彼女は「養われる存在」から「対等なパートナー」になりたいと気づき、今は働く傍ら大学院で学ぶ学生だ。下総はバブル期にOLとなったが、出産退職。仕事を模索しながら鬱々としていた頃の小さな新聞記事をきっかけにした出会いが今につながるという。女性の自立を目指すグループに関わり、さまざまな出会いを経て、現在は食をテーマにしたオリジナルイベント会社の代表として東奔西走の毎日だ。専業主婦暦10年の高島は、友人宅で出会った一人の女性の言葉に発奮して映画プラネット主催のキャリア支援講座に参加した。専業主婦を見下したその女性に猛然と反発して彼女は行動をおこしたのだった。講座終了後、映画プラネットのスタッフにエントリーして就業開始、1年後には愛知県主催のパソコン講座にも参加し資格取得を果たした。夫に依存して生きていた自分だが、働くうちに自立意識が芽生え、その結果夫も子どもも変わったと語る。林は娘、妻、嫁、母という役割に縛られ葛藤を感じていた40代の頃、大病を患い自分の生き方を変えたという。10代で封印した学びたいという気持ちに従って、放送大学、同大学院を修了し今は仕事と研究の毎日だ。皆それぞれに転機があり、その節目に動くことが、人生を自分の意思で動かし始めるきっかけになっているようである。

クルンボルツは「計画された偶発性」を生み出す5つのポイントを以下のように示している。①好奇心：新しい学習機会の模索②持続性：めげない努力③楽観性：新しい機会を「実現可能」ととらえる④柔軟性：信念、概念、態度、行動を変える⑤リスク・テイキング：結果が不確実でも行動に移す（出展：『その幸運は偶然ではないんです！』の内容を元に見館好隆が作成）⁸ 彼女たちの最初の一步は、もしかしたら気まぐれだったかもしれないが、その心の動きの原因はこの5つのどれかにあてはまる。そしてひとつ歯車が動き出すと、それが隣の歯車に連動し、少しずつより大きな動きになっていくのだ。

今までに述べた二つの理論は、女性の再就業という先輩トークの講師たちに共通する課題を考える上で、たいへん有用だといえる。おおまかにいえば、前者は、職務キャリアだけに重点をおいたキャリア理論ではなく、さまざまな役割を生きる人たちの生活全般を包含してキャリアとみなす点が再就業女性の実態に合致する。また家庭人として大きな役割を担いながら、市民、労働者でもある彼女たちにとって、家族などのさまざまな要因によって予測通りにキャリアを構築することはかなり困難であるが、後者の「予期せぬ出来事がキャリアの機会に結びつく」という考え方は、彼女たちの実践の理論的裏づけとなる。

4 まとめにかえて

数多のキャリア本、キャリアデザイン指南書は、ほとんどの場合フルタイムで働く労働者を対象としている。筆者の手元にある資料の中に、さまざまな役割をこなしながらパートタイム労働を選ぶロールモデルは見つからない。けれど現実には、家庭や地域でいくつもの役割を抱えながら、短時間で働くことを選択する女性は少なくない。「ちょっと先行く先輩トーク」の講師たちはまさにその状況におかれている女性たちであり、多様な働き方の実践版である。そういう女性たちの今後のキャリアデザインはさまざまだ。将来的には正規労働を希望する人、NPOや地域活動と仕事を並立させるためにパートタイム労働を継続して選ぶ人、起業を考える人もいるだろう。これこそが、各個人のライフステージ、ライフデザインに沿った働き方であり、ワーク・ライフ・バランスの取れた生き方といえよう。今後望まれるのは、人がそれぞれの人生の段階で新しい展開を希望するときに、それを受容しやすい社会の構築である。具体的には、職業訓練の機会の拡大や労働市場の流動化などであろう。そのような社会を構築していくためにも、わたしたちの実践を社会に発信し続けたいと考えている。

1 独立行政法人国立女性教育会館 ノエックブックレット3「キャリア形成に生涯学習を生かした女性たち」 同4「キャリア形成にNPO活動をいかした女性たち」

2 金井壽宏 2002「働く人のためのキャリアデザイン」PHP新書

3 キャリア形成を支援する労働市場政策研究会報告書 平成14年 厚生労働省職業能力開発局

4 労働政策研究報告書 No.63 2006

5 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書 平成16年 文部科学省

6 大久保幸夫 前掲書(2006「キャリアデザイン入門[I]」日本経済新聞出版社)

7 渡辺三枝子編著 2007「キャリアの心理学」ナカニシヤ書店

8 「計画された偶発性」を試す リクルートワークス研究所 Works Institute より抜粋
http://www.works-i.com/special/basic_ability/part_4.html